

「いのち」の視点から

酒井 一真

マックス・ウェバー著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で「もしもこのような文化が、どんどん進んでいくなれば、そこには精神のない専門家、心情のない快樂人、そういう人たちが無数に生まれてきて、そうしてその無なるものは、自分たちが人類最高の段階に上り詰めたと自惚れるであろう」との趣旨の言葉を遺している。その後、一世紀を経て、この言葉は現実のものとなって、人々の多くは、職業を通じて貨幣を獲得し快樂を求め、学ぶこと働くこと、出遇うことの喜び、すなわち生きる喜びを失って刹那主義の人生に埋没している。加えて現代は病める地球の時代で、核の問題、環境破壊、資源の問題等、まさに悩みは深刻だ。毎年の自殺3万何千人（毎日90余人）、ここ半世紀の間にこの国で行われた人工中絶6700万人老若男女を問わぬ非情な暴力事件の多発、今日ほど「いのち」の軽くあつかわれている時代はない。

宇宙の時代を迎えたといわれる今日だが宇宙空間の温度は超高温か超低温、人の住める場ではないそうだ。宇宙飛行士が宇宙に見る星の中で地球は何と小さなことよ。ただその姿は青く輝いて美しいと言う。高温度化がすすみ、自然環境は崩れ、フロンガスの放出によるオゾン層の破壊で人命の危険まで騒がれている今日、「いのち」の大切を思う。

ところで、某書に記す「生命観」を転記すると、分子生物学の生命 大脳生理学の生命 医学の生命（以上、客観的生命） 自己意識の生命 無意識的己の生命 人格的身体の生命（以上主体的生命） 開放的生命（開かれた生命）とあって、この順序は外観的ないのちから内面的ないのちへと順序づけられた由である。仏教の教えるところは爬虫類、哺乳類から山川草木に至る全てに仏性を見、すべての存在が一つのいのちに貫かれているところに大きな意味を認め讃えている。

他の生きもののいのちを尊重する中から、人のいのちの健全性が高められる。

「生きている」とはどういうことか、生きもの（人は勿論）一つ一つの違い、多様性を理解すると共に、共感し、分かり合えることの大切さを身につけ、助け合って交流する。そうした中で助けるものと助けられるものが共に生かし生かされ合う世界が開かれ感動がある。

自分に関係ないものは切り捨ててしまう傾向の強い社会の中で、すべてがかげがえのない「いのち」を生きていることの意味を改めて考える。

問題を共通に抱える人どうしが交流し、話し合う中から真の力が生まれてくると思うし、そこを核にして皆が包みこむ連帯が育つことが大切だ。